

島生み（その二） その3

次に伊予の二名（ふたな）の島を生みたまひき。この島は身一つにして面四つあり。面ごとに名あり。かれ伊予の国を愛比売（えひめ）といひ、讃岐の国を飯依比古（いいよりひこ）といひ、粟（あわ）の国を、大宜都比売（おほげつひめ）といひ、土左（とさ）の国を建依別（たけよりわけ）といふ。次に隠岐（おき）の三子（みつご）の島を生みたまひき。またの名は天の忍許呂別（おしころわけ）。次に筑紫（つくし）の島を生みたまひき。この島も身一つにして面四つあり。面ごとに名あり。かれ筑紫の国を白日別（しらひわけ）といひ、豊（とよ）の国を豊日別（とよひわけ）といひ、肥（ひ）の国を建日向日豊久士比泥別（たけひわけひとわくじひわけ）といひ、熊曾（くまそ）の国を建日別といふ。次に伊岐（いき）の島を生みたまひき。またの名は天比登都柱（あめひとつはしら）といふ。

／解説／

古事記の神話の形式による言霊学の教科書が天津磐境という十七の言霊で構成された心の先天構造を明らかにし、次にその先天構造の活動によって後天現象の単位である三十二の子音を創生する章に入ることとなりました。古事記は生れて来る子音の説明に入る前に、生れて来た子音が位置する宇宙の中の場所、これを島と名付けて、予め設定しておく作業を進めています。島の数は全部で十四有ります。その中の五島は先天十七言霊の区分、次の三島は生れる子音言霊三十二（三十三）の区分、残りの六島は言霊五十音を整理・運用して人間精神の最高規範（鏡）である三貴子（みはしらのうずみこ）を誕生させるまでの整理段階の順序とその内容を表わしたものであります。

島々の名の説明に入る前に、右の十四島の区分を御理解頂く参考として、私の言霊学の師小笠原孝次氏のそのまた師でありました山腰明将氏が作成しました十四島の区分と配列の図表を掲げることといたします（次頁参照）。初めの五島は既に出て来ました先天構造五段階を説明するものであります。それに続く九島に就きましては、古事記の話が進み、それぞれの区別が終る節々に於て説明させて頂く事といたします。

淡路の穂の狭別の島（あわじのほのさわけ）

先天構造の最初に出て来る言霊ウの区分を示す島名です。神話形式で言えば天の御中主の神の宝座ということになります。アとワ（淡）の言霊（穂）が別れ出て来る（別）狭い（狭）道（道）の区分（島）という意味であります。この島の名の意味・内容は古事記解説の冒頭にあります天の御中主の神（言霊ウ）の項の全部と引き比べてお考え下さるとよく御理解頂けるものと思います。「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は、天の御中主の神……」の古事記冒頭の文章自体がこの島名の意味を端的に表わしているとも言えましょう。

伊豫の二名島（いよのふたなしま）

言霊ア・ワの区分、高御産巢日（たかむすび）の神、神（かみ）産巢日の神の宝座。伊豫（いよ）とは言霊イ（牛）のあらかじめと意味がとれます。何物もない広い宇宙から主客未割である意識の芽が現出します。言霊ウです。それが人間の思惟が

加わりますと瞬間的に言霊アとワ（主と客）の二枚に分れます。人間は物を考える時には必ず考える主体と考えられる客体に分れます。これが人間の思考性能の持つ業であります。「分（わ）ける」から「分（わか）る」、日本語の持つ妙とも言えます。

この主と客に別れることがすべての人間の自覚・認識の始まりです。言霊ウの宇宙が言霊アワの宇宙に剖判し、次々とオヲ、エエの宇宙剖判となり、終にイ・ヰの宇宙に剖判する事によって「いざ」と立上り、現象子音の創生が始まります。言霊イヰによる子音創生が始まりますのも、その予めに言霊アワに分かれたからでありますから、伊豫の二名（アワ）の島と呼ぶわけでもあります。

この島は身一つにして面四つあり。面（おも）ごとに島あり。

身一つ、とは一枚（言霊ウ）から二枚（言霊アワ）に分れることから、身とは言霊ウを指します。言霊アワから言霊オヲ、エエが剖判します。そこで「面四つ」と言っています。

面ごとに名あり。かれ伊予（いよ）の国を愛比売（えひめ）といひ、讃岐（さぬき）の国を飯依比古（いひよりひこ）といひ、粟（あは）の国を、大宜都比売（おほげつひめ）といひ、土左（とさ）の国を建依別（たけよりわけ）といふ。

面四つのそれぞれを言霊に置換えますと、愛比売とは、言霊エを秘めているの意で、言霊エは言霊オから選ばれる事から、愛比売とは言霊オであります。飯依比古の飯（いひ）は言霊イの霊（ひ）で言霊のこと、比古とは男性で主体を意味します。言霊を選ぶ主体は言霊エ、即ち讃岐の国は言霊エです。大宜都比売（おほげつひめ）とは「大いによろしい都を秘めている」の謎で、都とは宮子（みやこ）で言霊の組織体の意でありますので、粟の国とは言霊ヲの事を指します。建依別（たけよりわけ）とは建（たけ）は田気（たけ）で言霊のこと、依（より）は選（より）で選ぶの意で、土左の国は言霊エを指します。伊豫・讃岐・粟・土左の四国は「面四つあり」の四に掛けたもので、それ以外の意味はないように思われます。

【註】 当会発行の「古事記と言霊」の書の九十四頁、九行に「建依別全部で言霊を選り分けたもの、となり言霊エとなります」とある言霊エはエの間違いであります。訂正を願います。

